

日本における図書館史研究の現状と課題 (続)

石井 敦 (東洋大学)
河井弘志 (立教大学)
川崎良孝 (椋山女学園大学)
藤野幸雄 (図書館情報大学)

第二節 日本図書館史研究

(一) 総論

日本における図書館史の研究は、第二次大戦以後、本格的な歩みを開始したといえるだろう。

それは、大戦前の日本の図書館が、公共図書館はもちろん、大学図書館などにおいても、厳しい思想統制の下におかれ—全出版物が政府の手により検閲されていた—図書館の自由はもとより学問の自由さえも存在しなかったため、図書館学全体の研究も、いきおい整理技術的な側面にたよらざるをえなかったのである。

もちろんそれだけでなく、明治革命以後、国家全体が急激な資本主義化を遂行してきた過程において、欧米諸国の文明文化をトータルに摂取するのではなく、「士魂商才」という合言葉もあったように、技術的側面の吸収は全国的なものであった。

しかし、そのような条件下にあっても、先覚的な図書館員による日本図書館史の研究は行われ、大戦終結前までにはいくつかの単行本が成果としてあらわれている。和田万吉『図書館史』(1936年)、小野則秋『日本文庫史』(1942年)、同『日本文庫史研究』上巻(1944年)、竹林熊彦『近世日本文庫史』(1943年)などである。

しかし、これらは、他の国々と同じく、初期開拓者の限界として、史料の収集が精一杯であって、和田は、当時日本で入手できた欧米諸国の断片的な情報を、各国別に主要図書館の設立年、蔵書冊数などをまとめる程度だったし、小野も我が国の主要コレクションの成立年とその推移を追いかけたものであった。まだ、それらが生まれてくる社会経済的な背景などに言及する余裕はなかった。ただ、竹林の場合は、明治時代に限定しており、基本的な史料をおさえて、明治の文化的状況の中で図書館を把握することに成功している。

それでも、図書館史研究のパイオニアとして、これだけまとめあげるには多大の労苦をかさねたわけで、その労苦があったからこそ、大戦後、日本の図書館史研究がいち早くスタートできることができたのである。

1945年、日本は天皇制ファシズムの鎖りからとき放たれ、基本的人権を保障した新憲法の下に民主主義国家としてあゆみはじめるが、図書館も新しい理念にもとづく図書館法をもつことになった。また新教育法体制の下に、大学・高校・中小学校も全国的に図書館を付置することが義務づけられ、図書館員と共に図書館学研究者も激増し、図書館史研究は質の面でも量の面でも大きく前進することになった。

ただ、詳細は各論にゆずるが、全体として公共図書館史の分野、なかんずく、明治時代を取り扱ったものが多く、その他の時代は少ない。また、大学・学校図書館史もきわめて少ない。公共図書館の通史も、明治期から第二次大戦までを扱ったものが最近漸く一冊にまとまって刊行された状態で、今後の課題である。

今、日本は、GNP 世界第二位とか、Japan as no. 1. などといわれ、大きく世界経済の上にのし上り、注目されつつある。しかし、図書館の普及・発達の状況からみると、依然発達途上国であるといつて間違いない。したがって、さらに図書館の普及を目指すと共に、より一層国民の中に図書館サービスを浸透させることが急務であろう。しかし、その方向と具体的な方法はいかにあるべきか、欧米先進諸国のこれまでの道と同じように辿るものか、あるいは別の道を歩むのか多くの図書館員は模索しつつあるが、図書館史の研究も、この大きな問題意識をもちながら研究をすすめている。後述のように、英米をはじめヨーロッパ各国の図書館史研究が本格化し、さらにソ同盟、中国の図書館史研究にも手がつけられはじめています。

(二) 日本図書館史研究 各論

第二次世界大戦後における日本の図書館史研究は、当時の民主主義国家建設を指向する全国的な要求に沿って、まずこれまでの図書館の在りかたにたいする徹底的な批判のうえにすすめられた。

そこでは、日本の公共図書館が民衆の基礎に立って運営されたものではなく、国家的要請により生まれたことを明らかにすると共に、民主的社会の基礎のひとつとしての図書館はいかにあるべきか、を求め、図書館史の中での民衆運動の足跡を追求してきた。

すなわち、1867年、明治革命により成立した天皇制絶対主義政権は、“富国強

兵”“殖産興業”をスローガンに，“上から”の国民教育体制をシフトするが、公共図書館もその一環に位置づけ、民衆の自由な知的・学習要求を無視し、専ら天皇制イデオロギーの注入機関として、機能してきたことを暴露すると共に、他方では、日本のブルジョア民主主義革命と言われる1880年代の自由民権運動や、1910年代の大正デモクラシー運動さらに1930年代の反ファシズム運動の中で、本来の公共図書館であるべき、民衆要求の読書施設づくりの歴史的事実が発掘された。

その後図書館活動の進展に伴い、様々なこれまでの図書館活動の本来的な意義を問い直す図書館活動の歴史や、地方図書館の振興を考えるための地方図書館史、さらには各時代別により精緻な研究がすすめられるようになった。例えば、日本における巡回文庫の実施とその後の日本的展開や、open access の導入と大部分の館ではそれを実施しえなかった歴史的経過、あるいは、ファシズム時代の苛酷な図書館弾圧の実態などである。

時代別では明治時代の研究が圧倒的に多く、また最近では昭和ファシズム時代下の図書館状況、清水正三編『戦争と図書館』がまとめられた。戦後もすでに40年を経過したこともあって、JLA 編『戦後公共図書館の歩み』（1980年）が刊行され、また図書館法成立をめぐるの本格的な研究、裏田武夫・小川剛『図書館法成立史資料』（1968年）がある。しかし、まだ明治革命後100年を対象とした公共図書館の通史が出ていない。前述のように、1945年までをまとめた永末十四雄『日本公共図書館の形成』（1984年）があるだけで、そのほか国立教育研究所編『日本近代教育百年史』で、大幅に社会教育の中の図書館を取り扱ったものが出た程度である。

地方別では、他国ではみられないほど多くの館史がある、といえそうである。これは日本独自の、図書館が行政機関色を強くもったためであろうか、かなりの図書館が行政報告的な意味をもって、30年史、40年史などを発行している。しかし上記のように、行政機関の業務報告的制約をうけ、個々の事業を羅列したものが圧倒的に多く、史料的意味しかもたないかも知れない。それでも、『宮城県図書館百年史』（1984年）、『千葉県図書館史』、『千代田図書館八十年史』（1968年）、『神奈川県図書館史』（1966年）、『山口図書館五十年略史』（1953年）などは研究書として評価できよう。また、個人の著述になる地方図書館史として間山洋八『青森県図書館運動史』（1967年）、平田守衛『滋賀の図書館・歴史と現状』（1980年）、山県二雄『図書館をめぐる日本の近世』（1981年—岡山県—）、藤丸昭『図書館の理念と実践』（1977年—徳島県—）がある。地方図書館史は論文を含

めると、精粗の差はかなりあるものの10県程度を除いてほとんど研究が行われているといえるだろう。

大学図書館史も通史はない。そればかりか公共図書館史に比べると著しく研究は遅れている。個別図書館史として『京都大学附属図書館六十年史』（1961年）、『慶応義塾大学図書館史』（1972年）、『一橋大学附属図書館史』（1975年）が代表的なものである。研究史としてやや古いが岩猿敏生「戦後における大学図書館研究史」（1962年）を挙げておく。

学校図書館史の研究はより遅れているといえよう。部分的に塩見昇『教育としての学校図書館』（1983年）に触れ、その他いくつかの論文があり、個別館史では筒井福子『東京都立日比谷高等学校図書館百年の歩み』（1979年）をみるだけである。

国立図書館は粗末な『上野図書館八十年略史』（1953年）であったが、『国立国会図書館三十年史』（1979年）という立派なものがだされている。

個別問題の歴史は、部分的な論文が各分野で書かれているが、単行書としては武居権内『日本図書館学史序説』（1960年）のみである。しかし、これは開拓期に属するもので、今後の研究のマニュアル、ないし研究者のためのハンドブックの域を出ていない。

図書館思想史の分野では、漸く『衛藤利夫』（1980年）、『中田邦造』（1980年）、『佐野友三郎』（1981年）の3冊が刊行され、また『図書館を育てた人々・日本編Ⅰ』（1983年）が出た。『育てた人々』は、18名の日本の図書館運動、図書館学研究などに貢献した人物を紹介している。専門職意識をもった図書館員も増加している今日、この分野の研究はますます盛んになるだろう。

なお、前近代の図書館は“文庫”といわれかなり古くから日本にも存在していたが、これらについては、総論で紹介した小野則秋の著作のほか、個別のものでは森潤三『紅葉山文庫と書物奉行』（1933年）、関靖『金沢文庫の研究』（1951年）、桑原蓼軒『日本最初の公開図書館芸亭院』（1932年）などがある。また、やや図書館史の領域から外れるが、長友千代治『近世貸本屋の研究』（1982年）、今田洋三『江戸の本屋さん』（1977年）、鈴木敏夫『江戸の本屋』（1980年）なども出た。全体的にみて、近代以前の読書施設の研究は、文学、歴史学等の領域で、戦後急速に研究成果があがり、関係史料も豊富に発掘されているので、全面的に書き改められるべき状況にきているといえよう。

最後に文献目録であるが、これも弱い。図書館短大図書館研究会編『図書館史に関する文献目録』（1970年）が唯一のもの、公共図書館に関しては石井敦『日

本近代公共図書館史の研究』(1971年)の巻末文献目録が現在までのところ最も詳細である。
(つづく)

第16回運営委員会は、4月8日(火)新宿の滝沢(午後6時30分～9時)で開催した。出席は石井敦、工藤一郎、是枝英子、油井澄子、阪田蓉子、川崎良孝。「図書館史研究」第3号(夏季刊行)の編集は順調に進んでいる。本年度のセミナーについては研究委員会案を了承。また、雑誌の長期展望、図書館史教育の現状などについて話あった。次回の運営委員会は6月20日(金)東京にて。

事務局からのお願い。61年度会費の未納会員は会費1,000円をおおくりください。振替は前回のニュース・レターの時に同封しております。

61年度新入会員

第4回 図書館史を考えるセミナー

来る9月、京都で第4回の「図書館史を考えるセミナー」を下記の要領で開催します。多数の会員の参加をお待ちしております。

「近代化」とか「工業化」とかがそうであるように、図書館の発展も、国によって遅速の差があります。そして、後発の国は先進国から図書館の思想・技術を受け入れ、それを消化吸収しながら(時には不消化のまま)、その国独自の発展過程をたどることになります。今回は、五つの国について、英米その他の図書館先進国からどのように図書館思想(及び図書館技術)を受け入れ、それを基礎に各国の図書館がどのように発展してきているか、その間の状況を5人の方に発表していただき、参加者とともに研究討議したいと考えます。

テーマ 「図書館思想の受容」

日時 1986年9月14日(日)午後1時から

1986年9月15日(祝)午後4時まで

会場 京都市左京区岡崎成勝寺町91

トラベラーズ・イン(京都市美術館の南側)

☎ (075) — 771 — 0225

参加費 2,500円

懇親会 5,000円

日 程 9月14日(日)

受 付	13 時～
開 会	13:30
発表(1) 戦後日本における公立図書館思想の受容	13:40～14:40
山口源治郎	
休憩	
発表(2) 解放後韓国における図書館思想の展開	15:00～16:00
宇治郷 毅	
発表(3) 20世紀中国におけるアメリカ図書館学と ソ連図書館学の相剋	16:00～17:00
石塚 栄二	
懇親会	17:15～

日 程 9月15日(祝)

発表(4) 第一次大戦前後のフランスにおける 図書館学教育	9:15～10:15
赤星 隆子	
休憩	
発表(2) ドイツ近代公立図書館思想の特質と 英米からの影響	10:30～11:30
河井 弘志	
休憩	11:30～13:00
総括討論	13:00～16:00
閉 会	

注意・ 参加申込の方法等については6月末に発行する次回ニュース・レターで、詳しく案内します。

なお、宿泊につきましては、下記の要領で個人的に申し込んでください

1. トラベラーズ・インで宿泊できます。☎(075) —771 —0225
2. その場合の費用は、一泊 2,900円。洋室はツイン、和室は3～4名で、いずれもバス・トイレ付です。シングルはありません
3. 予約は各自電話で松崎課長に直接予約してください。その時、図書館史研究会会員であることを告げてください。
4. 期限は7月10日です

研究委員会 委員長 森 耕一

委 員 塩見昇, 阪田蓉子, 山口源治郎, 川崎良孝